

大中華文庫

漢日對照



大中華文庫

漢日對照

紅樓夢

紅樓夢

II

大中华文库

汉日对照

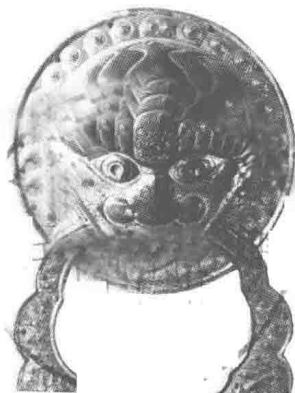
大中華文庫

漢日对照

红楼梦

紅樓夢

II



曹雪芹 高鹗 著
伊藤漱平 译

曹雪芹 高鹗 著
伊藤漱平 訳

人民文学出版社
人民文学出版社

大中华文库

汉日对照

大中華文庫

漢日対照

红楼梦

紅樓夢

II



曹雪芹 高鹗 著
伊藤漱平 译

曹雪芹 高鹗 著
伊藤漱平 訳

人民文学出版社
人民文学出版社

第十七、十八回

大观园试才题对额 荣国府归省庆元宵

诗曰：“豪华虽足羨，离别却难堪。

博得虚名在，谁人识苦甘。”

话说秦钟既死，宝玉痛哭不已，李贵等好容易劝解半日方住，归时犹是凄恻哀痛。贾母帮了几十两银子外，又另备奠仪，宝玉去吊纸。七日后便送殡掩埋了，别无述记。只有宝玉日日思慕感悼，然亦无可如何了。

又不知历几何时，这日贾珍等来回贾政：“园内工程俱已告竣。大老爷已瞧过了，只等老爷瞧了，或有不妥之处，再行改造，好题匾额对联的。”贾政听了，沉思一回，说道：“这匾额对联倒是一件难事。论理，该请贵妃赐题才是；然贵妃若不亲睹其景，大约亦必不肯妄拟。若直待贵妃游幸过再请题，





第十七・十八回

大觀園に才を試し 対額を題すること
 栄国邸に親を省い 元宵を賀すること

まずは詩をひとつ――

豪華はうらやまし
 別離はたえがたし
 虚名につつまれて
 人知れぬこの悩み

さて、秦鐘が身まかったとあって、宝玉の泣き嘆くさまは傍目にも痛ましいほど。李貴らがやつのことでなだめすかし、どうやらおさまりはしましたが、帰宅する段になってもなお悲しみ嘆いてばかりいるありさまでした。後室は数十両の銀子を出してやり、別に香奠まで用意させ、宝玉が紙銭を焚きにおもむきます。七日ののちには柩を送り出して埋葬も済みましたが、そのことはとりたてて述べるまでもなし。ひとり宝玉だけは、故人を偲んでつらい日々を過ごしていますが、さりとてまたとりかえしのつくことではありません。

それからまたいぶ経ったとある日のこと、賈珍らがうち連れて賈政のもとへ報告に顔を出しました。

「園の内部工事が完成をみましてございます。うえの殿様（賈赦）にははやご覧済みにて、このうえは殿様のご覧を待つばかり。もし適当でないところがお目にとまりましたときは、さらに手を入れさせます。なおまた額や聯の文句もお選びいただきたいものでございますが」

賈政はそれを聞くと、しばし思案の態でしたが、やがて、

「この額や聯というのはなかなかもってむずかしい仕事だな。すじからいえば、貴妃にお願いして考えていただくべきところだが、貴妃とて、実地にご覧にならぬことには、おそらくこしらえごとはお引き受けくださるまい。かといって貴妃のお成りを待ち、さてそれからとい



偌大景致若干亭榭无字标题，也觉寥落无趣，任有花柳山水也断不能生色。”众清客在傍笑答道：“老世翁所见极是。如今我们有个愚见：各处匾额对联断不可少，亦断不可定名。如今且按其景致，或两字、三字、四字，虚合其意，拟了出来，暂且做灯匾联悬了。待贵妃游幸时再请定名，岂不两全。”贾政等听了，都道：“所见不差。我们今日且看看去。只管题了，若妥当使用；不妥时，然后将雨村请来，令他再拟。”众人笑道：“老爷今日一拟定佳，何必又待雨村？”贾政笑道：“你们不知。我自幼于花鸟山水题咏上就平平，如今上了年纪，且案牍劳烦，于这怡情悦性文章上更生疏了。纵拟了出来，不免迂腐古板，反不能使花柳园亭生色，似不妥协，反没意思。”众清客笑道：“这也无妨。我们大家看了公拟，各举其长，优



うのでは、これほどの大景の、どの亭樹にも命名一つしてない結果となり、これもさびしくっておもしろくない気がする。いくら花柳山水ばかりそなわっていても、さっぱり風情なしということになってしまおうよ……」

とりまきの食客たちがわきからにこやかに、

「お殿様のお考えはまことにごもっともしごく。いままえどもの愚見を申し述べさせていただきますれば、いずこにせよ、匾額・対聯がなくてはなんとも恰好がつかますまいし、さりとしてこれと決めて命名しておくことも考えもの。ここは取りあえず、景色とにらみあわせ、二字なり三字なり四字なりに、その意に因んでこしらえたものを、当座、額や聯の形に仕立てた行灯に記して懸けておき、いずれ貴妃の行啓を仰いで改めて命名をお願いするとういう手順にいたしますれば、どちらも立とうというものではございませんか」

賈政らはこれを聞いて異口同音にいいました。

「なるほどもっともなお考えだ。それでは一同で今日はひとまず下見に出かけるとして、ともかく一応命名してみたうえで、もしびったりしたのができれば採用する、いいのができないようなら、改めて雨村どのにでも出馬を願い、作りなおしてもらおうとしましょうかな」

一同は笑いながら、

「お殿様のことでですから、今日これから一ひねりなさいますだけで、かならずや佳句を得られましょう、そのうえなにも雨村どのを煩わすことはございますまい」

賈政はそこで笑って、

「あなたがたはご存じあるまいが、わたしは幼い時分から花鳥山水の題味にかけては平凡このうえなく、それにいまでは年もとったし、事務的な仕事に追ひ廻されたりで、そういう性情を悦ばせるような文章とはなおさら縁遠くになっておりましてな、たとえ作ってみたところで、時勢おくれの古めかしいものになるのが関の山。それでは花柳園亭に風情を添えることもおぼつかないばかりか、ぴったゆかなければ、かえって打ちこわしですからな」

食客たちは笑いながら、

「その儀なれば、差しつかえございますまい。わたくしども一同がその場その場でもれなくこしらえてみて、めいめいこれと思う作を出し、そのうち出来のよいのは残され、不出来なのは捨てるとなさいまし



则存之，劣则删之，未为不可。”贾政道：“此论极是。且喜今日天气和暖，大家去逛逛。”说着起身引众人前往。贾珍先去园中知会众人。可巧近日宝玉因思念秦钟，忧戚不尽，贾母常命人带他到园中来戏耍。此时亦才进去，忽见贾珍走来，向他笑道：“你还不出去！老爷一会就来了。”宝玉听了，带着奶娘小厮们，一溜烟就出园来。方转过弯，顶头贾政引众客来了，躲之不及，只得一边站了。贾政近因闻得塾掌称赞宝玉专能对对联，虽不喜读书，偏倒有些歪才情似的。今日偶然撞见这机会，便命他跟来。宝玉只得随往，尚不知何意。

贾政刚至园门前，只见贾珍带领许多执事人来，一傍侍立。贾政道：“你且把园门都关上。我们先瞧了外面再进去。”贾珍听说，命人将门关了。贾政先秉正看门。只见正门五间，上面桶瓦泥鳅脊；那门栏窗隔皆是细雕新鲜花样，并无朱粉涂饰；一色水磨群墙，下面白石台阶，凿成西番草花样；



たならば、それでいかがかと存じますが……」

賈政はそこで、

「フム、そのご意見はしごくごもっとも。さいわい今日は暖かな日和ゆえ、総出で散歩がてら出かけるとしましょうか」

こういって立ちあがり、一同を引き連れてやってきました。賈珍は園へ先行して、みなの方にそのよしを触れます。

ところで近頃、宝玉が亡き秦鐘を偲んではいかにも憂鬱そうに暮らしていますので、後室はいつも人に言いつけては宝玉を園内に連れてゆかせ、気ばらしをさせるのですが、ちょうどこのときも園内にはいつてきたばかりのところ、そこへひょっこり賈珍が姿を見せ、彼に笑いかけて、

「あんたはまだ逃げ出さないでいたの？お父上がいまにもこちらへいらっしゃるというのにさ」

それと聞いて宝玉は、乳母や若党たちをせきたて、すたこら園を脱け出しにかかりました。さて角をまがろうとした出会いがしらに、食客たちを従え向こうからやってきた賈政とぶつかりましたので、身を隠そうにも間に合わず、やむなく道の片側に棒立ちでいます。

賈政は近頃、塾長が宝玉をほめそやして、聯をこしらえるのだけは滅法うまく、まっとうな学問は好かぬのに、いっふう変わった才能ならあるようだ、と語るのを聞いていましたので、今日偶然こんな機会にぶつかったのをさいわい、腕試しをしてやろうと、即座についてくるよう言いつけました。宝玉もやむなくあとについてはゆきますものの、父の真意のほどをはかりかねてびくびくものでいます。

賈政が園の門前についたばかりのところへ、賈珍がおおぜいの執事たちを連れてやってきて、片側に居ながれます。賈政はそこで、

「ひとまず園の門をみな閉めてもらおう、わたしらは表を見たうえではいるからな」

それを聞いて賈珍は、下知をくだして門を閉めさせました。

賈政は最初正面から門をうち眺めました。その正門というのは五間あり、うえの方は筒形の瓦で泥鰌の背のように円く葺かれ、門の欄間や窓の格子にはともに流行の模様をあしらった手のこんだ彫り物がしてあり、朱だの胡粉だのの塗装は全然施してありません。一様に念入りに磨きこんだ煉瓦塼の下方には、白の石段に唐草模様が刻んでありますし、左右を見渡せば、雪にもまごう白しっくい壁が一面に続き、その下側



左右一望皆雪白粉墙，下面虎皮石随势砌去，果然不落富丽俗套。自是欢喜，遂命开门。只见迎面一带翠嶂挡在前面。众清客都道：“好山，好山。”贾政道：“非此一山，一进来，园中所有之景悉入目中，则有何趣。”众人道：“极是。非胸中大有丘壑，焉想及此。”说毕，往前一望，见白石峻嶒，或如鬼怪，或如猛兽，纵横拱立，上面苔藓成斑，藤萝掩映；其中微露羊肠小径。贾政道：“我们就从此小径游去，回来由那一边出去，方可遍览。”说毕，命贾珍前引导，自己扶了宝玉，逶迤进入山口。抬头忽见山上有镜面白石一块，正是迎面留题处。贾政回头笑道：“诸公请看此处，题以何名方妙？”众人听说，也有说该题“叠翠”二字，也有说该题“锦嶂”的，又有说“赛香炉”的，又有说“小终南”的，……种种名色不止几十个。原来众客心中早知贾政要试宝玉的功业进益如何，只将些俗套来敷衍。宝玉亦料定此意。贾政听了，便回头命宝玉



は大小の石を嵌めこんで虎の斑もどきに築いてあります。「ほう、これなら富麗の俗臭がないわい」と賈政は気に入りました。そこで門を開けるよう言いつけます。と、目にはいったのは前方に当たり行く手をさえぎっている一帯の翠の山。食客たちは口を揃え、

「この山はいい」

とほめそやしましたので、賈政、

「さよう、この山がないことには、足を踏み入れたとたん、園内の全景がそっくり目に映ります。それではなんの風情もなくなってしまうでしょうよ」

「御意。胸中あまた丘壑をいдаく底の人でなくては、とてものことにこうまではゆき届きますまいて」

と、一同が相槌をうちます。

そんなはなしをしながら、先へ進んで見渡しますと、白い石がそびえ、鬼怪然としたのや猛獣を思わせるのや、とりどりの形をしたのが手をこまねくかのようにして立ちはだかり、その表面には苔が斑につき蔦かずらが日の光をさえぎって、そのあいだに羊腸の小径がほの見えています。賈政はそこで

「この小径伝いにさきへゆき、もどりにあちらから出ることになれば、それでひととおり見物できるわけだ」

そういうと、賈珍を案内役として先に立たせ、自分は宝玉に手を貸してやりながら、うねうね道を辿って峠にさしかかりました。

ひょいと顔をあげて見ますと、山のいただきには鏡のように磨きあげた白い石がひとつ据えてあり、これこそは正面の命名場所。賈政は振り向いて、笑いながら、

「諸君、まあご覧なさい、ここにはどんな名をつけたものでしょうかな？」

これを聞いた一同、なかには「疊翠」の二字を題すべきだという者もあれば、「錦嶂」と題すべきだという者もあり、また「賽香炉」ではとの案に対して「小終南〔山〕」を持ち出す者もあったりして、とりどりの名称は数十でも利かぬほど。いったい食客たちは、実をいえば、賈政が宝玉の学業の進歩の程度を試す気でのにとうの昔に気づいていて、わざとこうした俗っぽいものばかり持ち出しては責めをふさいでいた次第、宝玉の方でもそれと察しをつけていました。

賈政は一わたり聞くと、振り返って宝玉に向かい、「こしらえてみ



拟来。宝玉道：“尝闻古人有云：编新不如述旧，刻古终胜雕今。况此处并非主山正景，原无可题之处，不过是探景一进步耳。莫若直书‘曲径通幽处’这句旧诗在上，倒还大方气派。”众人听了，都赞道：“是极。二世兄天分高，才情远，不似我们读腐了书的。”贾政笑道：“不可谬奖。他年小，不过以一知充十用，取笑罢了。再俟选拟。”说着，进入石洞来。只见佳木茏葱，奇花灼灼，一带清流，从花木深处曲折泻于石隙之下。再进数步，渐向北边，平坦宽豁。两边飞楼插空，雕甍绣槛皆隐于山坳树杪之间。俯而视之，则清溪泻雪，石磴穿云。白石为栏，环抱池沿。石桥三港，兽面衔吐。桥上有亭。贾政与诸人上了亭子，倚栏坐了。因问：“诸公以何题此？”诸人都道：“当日欧阳公《醉翁亭记》有云：‘有亭翼然’，就名‘翼然’。”贾政笑道：“‘翼然’虽佳，但此亭



なさい」と言いつけます。宝玉はそこで、

「古人のことばに『新を編むは旧を述ぶるにしかず、古を刻するはついに今を彫するにまされり』とあるのを聞いたことがございます。ましてここは、主たる山でも眼目となる景色でもなく、もともと題するまでもない場所でございます、景色を見歩くうえでのひとつの足がかりたるを出ません。いっそあっさり『曲径通幽処』（これよりは人も通わじ——唐の常建の五律「破山寺後禪院」第三句）といった古人の詩句でも記しておいた方が、やはり鷹揚な態度に映ろうかと存じます」

一同、これを聞いて口を揃えてほめあげ、

「なるほどごもっとも。宝玉さまは、天分お高く才情にめぐまれていらっしゃる。とてもわたくしどものように、無駄に書物を読んでまいたただけの者とはいっしょになりませんですな」

賈政は笑って、

「おほめが過ぎますよ。これは年端もゆかず、一知をもって十の役に立てるというやつで、お笑い草までのこと。いずれ改めて選定するとしましょう」

そういうと石の洞をくぐりぬけました。するとあたりにはみごとな樹木が青々と茂り、珍しい花が目もさめんばかりに咲きほこり、一すじの清流が花や樹木の繁みを縫って、岩石の裂け目の下へとそそぎ入っています。なおも数歩先へ進みますと、このあたりから次第に北に向かい、地は平坦に開けてきて、両側には高殿が空にそびえ立ち、彫刻を施した薨や五彩で色どった檻などが、山のくぼみや樹木の梢のあいだに見え隠れしています。俯して見るに、清らかな谷川の水は雪とそそぎ、石段は雲を穿たんばかり。白い石で欄干をつくって池や沼をめぐらしてありますし、石橋のところで三カ所流れがせかれ、獸面がその水を吞んでは吐きしていて、橋のうえには亭があります。賈政は一同と連れ立って亭に上がり、欄干によりかかって腰を下ろしました。さてそこで、

「諸君、ここにはなんと題したものでしょうな？」

と意見を求めます。一同は口を揃えて、

「そのむかし、欧陽公（宋の文人欧陽修のこと）の『醉翁亭記』には『亭ありて翼然たり』の句が見えますゆえ、これに取って『翼然』（屋根が鳥の翼をひろげた形に広がった形容）と命名いたしてはいかがなものか……」

賈政は笑って、



压水而成，还须偏于水题方称。依我拙裁，欧阳公之‘泻出于两峰之间’，竟用他这一个‘泻’字。”有一客道：“是极，是极，竟是‘泻玉’二字妙。”贾政拈髯寻思，因抬头见宝玉侍侧，便笑命他也拟一个来。宝玉听说，连忙回道：“老爷方才所议已是。但是如今追究了去，似乎当日欧阳公题酿泉用一‘泻’字则妥，今日此泉若亦用‘泻’字，则觉不妥。况此处虽省亲驻蹕别墅，亦当入于应制之例，用此等字眼，亦觉粗陋不雅。求再拟较些蕴藉含蓄者。”贾政笑道：“诸公听此论若何？方才众人编新，你又说不如述古；如今我们述古，你又说粗陋不妥。你且说你的来我听。”宝玉道：“有用‘泻玉’二字，莫若‘沁芳’二字，岂不新雅？”贾政拈髯点头不语。众人都忙迎合，赞宝玉才情不凡。贾政道：“匾上二字容易，再作一副七言对联来。”宝玉听说，立于亭上，四顾一望，便机



「なるほど、『翼然』もわるくないが、この亭は水上に建っております、やはり水に即して命名してこそふさわしかろうというもの。わたしの案では、欧陽公の『瀉ぎて両峰のあわいに出づ』、いっそあの『瀉』の一字を使うことにしたらと思いますかね」

食客のひとりが、

「いや、それは結構でございますな。いっそここは『瀉玉』の二字になさったら……」

と提案しました。賈政はひげをひねって考えこんでいましたが、ふと顔をあげてみますと、宝玉がそば近くはべっていますので、笑いながら彼に向かって言いつけました。

「おまえもひとつ作ってみなさい」

宝玉はこれを聞くと、さっそく、

「父上、さいぜんのご意見はごもっともでございます。さりながら、いま仔細に検討を加えてみますと、むかし欧陽公が醴泉に題して『瀉』の字を使われたのは妥当かと存ぜられますものの、さりとて、今日この泉にも『瀉』の字を使用するとなると、なにやら似つかわしくないものあるを覚えます。ましてやここはご省親のさいの聖駕をお駐めになる別墅だとは申せ、やはり応制（天子の命を受けて詩文を作ること）の例に準ずべきでありますのに、このような文字を用いるのは、いささか粗陋にして雅ならずとの感をまぬがれません。改めていますこし蘊藉にして含蓄に富めるを題していただきたいものですが……」

といいました。賈政は笑いながら、

「諸君、いかがです、いまの講釈をお聞きになりましたか？ さっき一同で新規に考え出そうとしたときには、おまえはまた古を述べるにしかず、などとほざきおった。そのくせいまわしらが古を述べようとしてかかると、こんどはまた粗陋でしっくりせぬなどと言い立ておる。ならばひとつ、おまえの案を披露して聞かせい」

と命じます。宝玉はそこで、

「『瀉玉』の二字をお使いになるのは、『沁芳』の二字に及ばぬかと存じます。いかにも新雅ではございませんか」

といったのけます。賈政はひげをひねりながらうなずくばかり、無言でいます。一同はすかさず迎合して、宝玉さまのご才情はなみなみならぬものがありで、などと持ちあげました。すると賈政は、

「額の文句は二字ならたやすいわい。こんどはひとつ聯を作ってみ



上心来，乃念道：

“绕堤柳借三篙翠。隔岸花分一脉香。”

贾政听了，点头微笑。众人先称赞不已。于是出亭过池，一山一石，一花一木，莫不着意观览。忽抬头看见前面一带粉垣，里面数楹精舍，有千百竿翠竹遮映。众人都道：“好个所在。”于是大家进入。只见入门便是曲折游廊，阶下石子漫成甬路。上面小小两三间房舍，一明两暗，里面都是合着地步打就的床几椅案。从里间房内，又得一小门出去，则是后院，有大株梨花兼着芭蕉。又有两间小小退步。后院墙下忽开一隙，得泉一派，开沟仅尺许，灌入墙内，绕阶缘屋，至前院盘旋竹下而出。贾政笑道：“这一处还罢了。若能月夜坐此窗下读书，不枉虚生一世。”说毕，看着宝玉，吓的宝玉忙垂了头。众客忙用话开释，又说道：“此处的匾该题四个字。”贾政笑



い」

と言いつけます。宝玉はこれを聞いて、亭上に立ち四方をながめ渡しましたところ、はっと心にひらめくものがあり、そこで口遊みしましたのが――

堤を繞りて 柳は三篙の翠を借り
岸を隔てて 花は一脈の香を分つ

賈政はこれを聞くと、うなずいてかすかに笑みを浮かべました。一同はわれがちにほめたたえます。さてそこで亭をあとにして池を渡ってゆくのですが、一山一石、一花一木に至るまで念入りに、なにひとつ見のがすまいと努めます。ところでひょいと顔をあげますと、目にはいったのは前方に立ち続く白壁、そのなかの数軒の精舎は無数の青竹にさえぎられて目かげになっています。一同は口々に、

「これはいい場所だ」

と感心しました。そこでみなうちへと進み入ります。見れば門をはいったところは曲がりくねった遊廊となっていて、階のしたに敷いた小石はそれがそのまま盛りあがった通路となっています。手前はこじんまりした三間ほどの屋舎で一明両暗の造り（一棟三間のうち、中央の一間は仕切りなしで、他は壁で仕切った造り）、なかにはみな場所柄に応じて作りつけの床几やら椅子・卓子があります。この奥の部屋にはまた小さな戸口がついていて、これを抜けるともうそこは裏庭で、大きな梨の木とそれに芭蕉が植えてあり、また二間ほどの小さな離れがあります。裏庭の塀のしたには裂け目があいていて、泉の支流がせいぜい一尺ほどの溝を通じて塀のうちへそそぎ入り、階や屋舎をぐるっと廻って表庭に達すると、これが竹むらの下をうねって抜けます。

賈政はにっこりして、

「ここは場所からしてわるくないが、もし月のある晩にこの窓べに坐して書見ができたなら、この世に生まれあわせた甲斐ありと感ずることだろう」

そういったあと、宝玉に視線を注ぎました。面喰らった宝玉は、とたんに首うなだれてしまいます。食客たちがあわてて助け船を出し、またいいますには、

「この額には四字を題しなければなりませんまい」